大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2011 年 3 月

空間分節により生じる「奥」性に関する研究

建築デザイン分野　　今村謙人

Abstract
人は見るものに対して、意味を見いだそうとする、そのように何かをとらえようとする時、視覚は大きな役割を果たす。しかし、現代は物事を表層的に解釈してしまい、「奥」という考え方を失いつつある。そこで、本研究は、建築の空間分節を操作することで、視覚性を越えた「その先」を感じるような新たな「奥」性を見いだすことを目的とする。さまざまな「奥」という意味を分類し、本研究の「奥」性との違いを明確にすることからはじめ、空間分節による分節と連続性に対し、視覚性に焦点を当てて分析をした。その結果、空間分節には、線的分節と、面的分節に分けられ、その分節に伴い発生するであろう「奥」性の可能性を示した。それを美術館と図書館の複合私鉄の設計に落とし込み、新たな「奥」性の可能性を探った。

■本論

１、はじめに

「その先に空間を感じる」
そんな私の空間体験を論考の出発点とする。
普段生活をしている中で、現実に見えている以上の世界を感じることがある。自分のいるここだけではなく、「その先」まで体感するような感覚である。そんな時私は、目に見えない空間を旅したような気分におそわれるのである。
建築は空間を規定し、限定する。そんな現実を押し広げてくれるものは何であるのか、という自己の空間体験からくる新しい空間に可能性を見いだす。

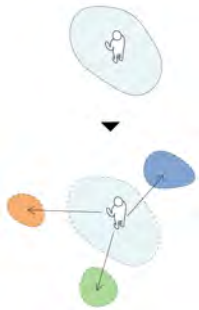


図１　「その先」イメージ

図２　空間の広がりのイメージ写真

２、背景・目的

人は見るものに対して、意味を見いだそうとする。そのようなとき、視覚は大きな役割を果たす。例えばアートや本と対峙する時、人は様々なことを想像する。しかし、現代は、物事をただ「見せる」という表層的な意味解釈に留まってしまていることが多く見られる。

図３　表層的建築例

都市・建築にしても、三次元的なメディア性が二次元的な、広告的な操作になってしまっているものが多く見られる。空間を扱う建築として、分節という操作を粗末に扱い、ただ分けて表層を操作することでは、都市の面白みがなくなってしまうのではないだろうか。そこで、本研究は、空間分節を操作することで、視覚を越えた「その先」を感じるような、新たな「奥」性を見いだすことを目的とし、自らの空間体験をもとに新しい空間を見いだしていきたい。

３、「奥」空間

本研究の「奥」性の立ち位置を明らかにするために、「奥」という言葉を整理する。まず空間的な意味として使われている
□物理的「奥」
□概念的「奥」
□心理的「奥」
□「奥」行き
以上４つに分類した。それぞれどのような使われ方をしているかまとめる。
□物理的「奥」

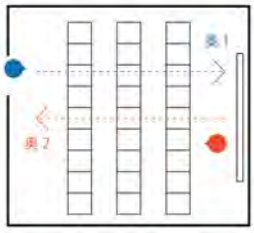


図４　物理的「奥」例

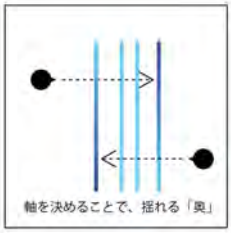


図５　ダイアグラム

自分のいる場所や表という場所を軸に設定することで、その軸に対して端を示すものを物理的「奥」としてとらえる。

図４のように、設定次第で、同じ空間の中でも「奥」という場が逆転することもある。

□概念的「奥」

図６　二条城二の丸平面

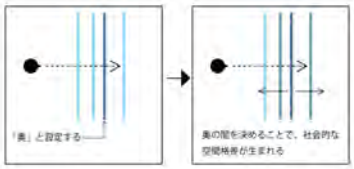


図７　概念的「奥」ダイアグラム

書院造りや町家等にあるもので、社会や生活の秩序との関わりから成立したものを、概念的「奥」としてとらえる。

寝殿造りの開放的な住居から、空間を仕切り始めて書院造りが発生し、それにより空間の階層性ができたことで生まれたものである。

□心理的「奥」

図８　鳥居

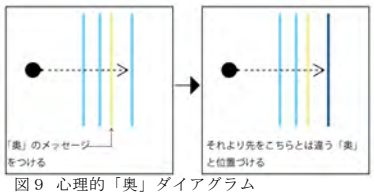


図９　心理的「奥」ダイアグラム

何かにメッセージを持たせることで、人に「奥」を伝えるものを、心理的「奥」としてとらえる。鳥居や置き石等があげられる。

神社における鳥居はケとハレを分ける象徴で、その先には世界と切り離された「奥」が待っていると思わせる効果がある。

□「奥」行き

図１０　奥行き知覚

空間内の距離（遠近）や、対象の三次元的広がりの知覚を奥行き知覚としてとらえる。

図１１　龍安寺

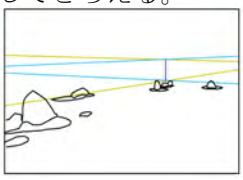


図１２　線遠近法

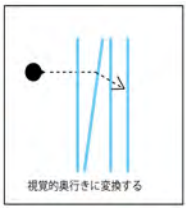


図１３「奥」行きダイアグラム

龍安寺の石庭では、有限な大きさの庭に、線遠近法を利用することで、鑑賞者に「奥」行きを感じさせる手法である。現実にある空間を広く見せようとする考え方から、「奥」行きを発生させるものである。

以上４つの「奥」に分類した。それぞれの「奥」は、ある空間を操作することで、現状とは違う空間をつくり，深みを出していた。

次に、本研究の「奥」性を述べ、今までの「奥」とどのように違うのか説明することで、位置付けを確立する。

４、本研究の「奥」性

まず、この写真を見てもらいたい。

図１４　本研究の「奥」事例

これは京都の仁和寺の金堂の写真である。この風景に出会ったとき、固定された空間が広がる感覚におそわれた。それを詳しく説明する。

まず、金堂にある灯籠が、こちらとあちら側の空間を分節している。しかしその分節はあいまいにこちらとあちらの空間を分節しながら連続している。視覚的にも、物理的にも繋がっているし、離れている状態であると言える。そして私が歩いて行くに連れて、分節と連続の関係が徐々に変化していく。

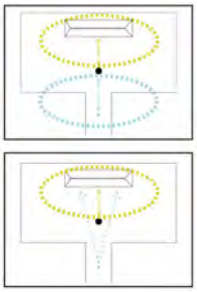


図１５　分節と連続図

図１６　分節と連続の変化

この分節と連続の変化の中に、本研究の「その先」を感じさせる「奥」性があるのではないかと考えた。つまり、分節と連続の関係が、視界の領域の変化を起こし、図１７のように、今見えている空間以上の空間を意識させ、感じさせているということである。

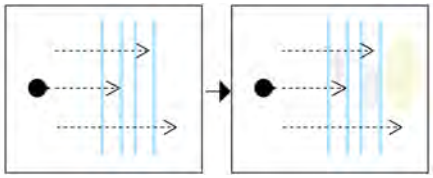


図１７　本研究「奥」性ダイアグラム

よって、本研究で述べる「奥」性は、空間分節によって起こる、分節と連続の変化に焦点を当てて分析していく。

５、分析

空間分節における分節と連続性について分析する。水平的な広がりに特化して行うため、両眼で確認できる範囲の水平角 90°を設定し平面図に可視領域を図示する。観測点を３つプロットすることで、可視領域の変化を見ることで、動きの中での分節と連続の関係を分析する。

図１８　領域図

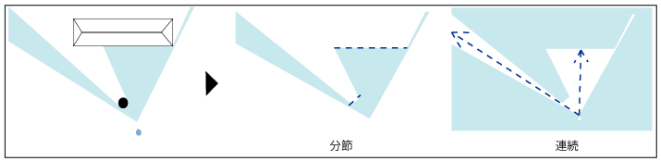


図１９　分節と連続図

可視領域の変化を図示し、分節と連続を図 １９のように図と地の関係で分析する。

図２１　事例１

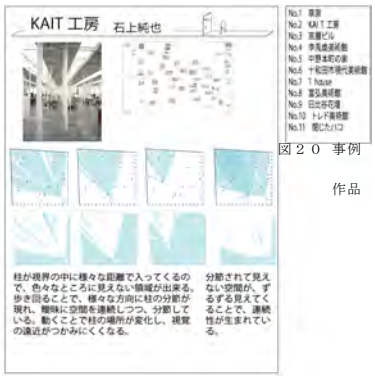


図２２　事例２

図２０　事例作品

都市から建築まで様々なスケールを分析対象とした結果､下図のようなグラフにプロットすることが出来た。

・水平軸に動的に分節、連続、つまり、空間を行き来できるかどうかという軸を設定した。

・垂直軸に視覚的に分節、連続、つまり先が見えるか見えなかという軸を設定した。

図２３　分節と連続グラフ

このように分析した結果､「奥」性を生み出すと考えられる、可視領域からみた５つ分節パタンを抽出した。

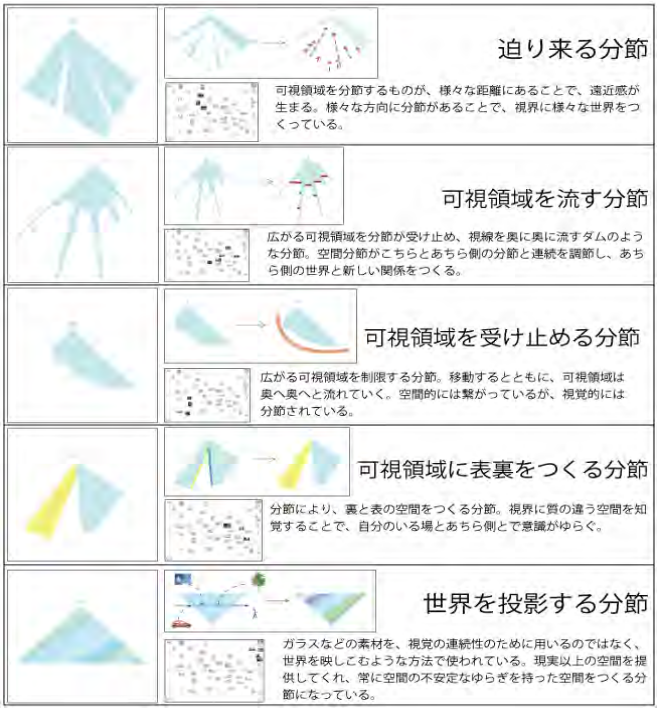


図２４　パタン一覧

５、空間分節から生じる風景

これらの分析より､「奥」性をもたらすと考えられる空間分節を２つ考え方に分類することができた。

□線的分節

□面的分節

この２つを詳しく説明する。

□線的分節は、空間を「分ける」という分節の考え方である。

ルビンの壺（図 25）は、世界を白と黒に分けている。人はこれを見ると、白い壺と、黒いひとのどちらかを認識しては、認識し直すことを繰り返す。つまり線によって場が揺らいでいるといえる。

図２５　ルビンの壺

図２６　線的分節事例

それと同じように、人が空間を移動することで、分節と連続の関係が変化する｡固定された空間が揺れ動き、その状態の先に､「奥」性を生み出すことができるのではないかと思う。

□面的分節は、空間を「隠す」という分節の考え方である。

「秘すれば花なり、秘さねば花なるべからず」

という世阿弥の一節がある。すべてを見せず、ほんの少しのことを象徴的に表現することで観客に想像させ、表現に膨らみを持たそうという考えである。

図２７　能

図２８面的分節事例

空間においても、面によってあちら側を想像させながら隠すことで、見えない空間を想像させ、空間に広がりを持たせることができるのではないだろうか。それが面的分節における「奥」性の可能性ではないかと思う。

以上２つの考え方を設計に応用することで､「その先」を体感する「奥」性を生み出すことことが出来るのではないかということを明らかにした。

６、小結

「奥」という意味を整理することで、本研究で述べる「その先」を知覚させる「奥」性の立ち位置を明確にし、空間分節の分節と連続性の変化を、可視領域を用いて分析した。その結果､「奥」性を生み出すと考えら

れる空間分節は、線的分節と面的分節という考えに分けられ、その分節に伴い発生するであろう「奥」性の可能性を提示した。この考えを用い、設計を提案する。

■計画

これまで述べて、分析してきた「その先」を感じさせる「奥」性が、どのように建築に反映され、空間化されるのかを計画で検証していきたいと思う。空間分節による、分節と連続性を分析することで明らかになった「奥」性の考え方を、設計にフィードバックすることで、さらに「奥」性を特徴付け、論考にとどまらず、デザインの設計手法として示したいと思う。

７、敷地

図２９　敷地北より

図３０　周辺図

地下鉄阿波座駅西木津川の東に位置する場所である。
敷地面積：１万 5,157 平米
この敷地は、元々大阪府庁舎が建っていた場所で，現在、大阪市が「江之子島まちづくりコンペ」と題し、文化やアートを利用し、まちづくりを推進している。しかし、現状は開発が停まっており、フェンスで囲まれている。都市に余っているこの広大な土地を、本設計の敷地とする。
またこの敷地は、大阪 Triangle 構想の中の一部であり、地下鉄阿波座駅と安治川左岸の川口・富島地区を結ぶ場所に敷地が位置している。この動線で人を引き込みつつ、「奥」性を取り入れた設計をする。
そして、敷地の特性として、北側は高層マンションに面した道、西側は木津川、南側は阪神高速が走っており、それぞれ特徴的な道であり、その道から建築がどう見えるかで、ファサードをつくる。

図３１　周辺図

７、分析から形へ
分析より、「奥」性をもたらすと考えられる空間分節と、それにより生まれるであろう「奥」性から本設計は、
・線的分節
分けることで見えてくる世界
・面的分節
隠すことで見えてくる世界
の両者をうまく取り込んで形にしていく。それより、本研究は、「壁」という構成要素で空間をつくっていく。

□壁
壁は面的分節性が強いが、切断面に必ず線的分節が現れ、こちらとあちら側の関係性が生まれる。二面性を持った壁を使うことで、線的・面的分節の両者を持ち得た設計を展開していく。

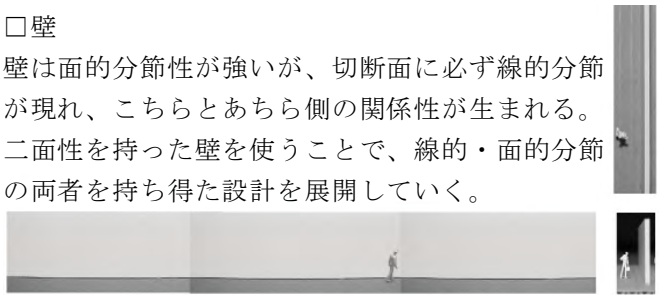


図３２　壁

□壁の連続
壁を連続させることで空間をつくることにより、自分のいる隣に、また隣にどんどん空間が増えていく。自分のいるこちらと壁の向こうのあちら側が明確に分けられる。見えない空間が増殖していくと想像すると、無限の空間が広がるような感覚を覚える。

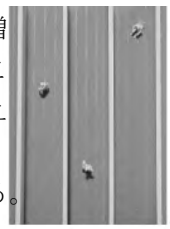


図３３　連続する壁

□壁空間を切断
連続した壁の空間を切断することで、空間を生み出すと同時に、線的分節を発生させ、層状の空間をつくる。

図３４　模型写真

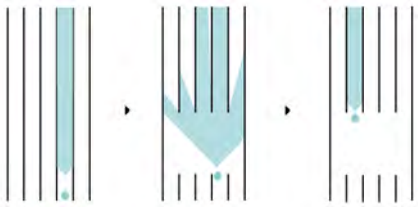


図３５　可視領域の変化

連続した面的分節を切断することで、見えていなかった隣と、その隣も露になり、広い空間が生まれる。そして限定されていた可視領域がいきなり広がり、隠れていた様々な空間を体感することで、空間が広がるような感覚を感じる。

□交わり
層状空間を交わらせることで、線的分節に囲まれた空間をつくる。

図３６　模型写真

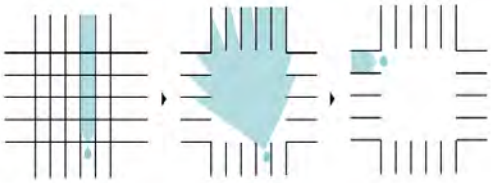
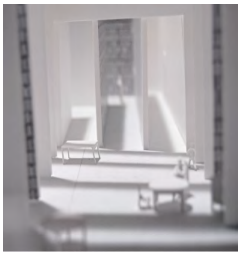


図３７　可視領域の変化



切断された空間にはいると、様々な方向に視線が広がり、視界が更に広がる。様々な選択肢が生まれる空間が出来る。壁の空間と対極な空間である。

図３８　大きな空間のロビー

□層状空間の高さに変化をつける

図３９　断面模型

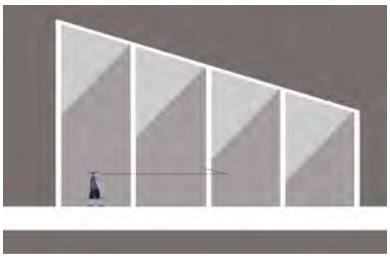


図４０　層空間ダイアグラム

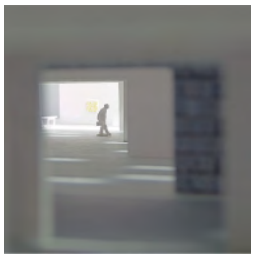


図４１　層空間

壁の高さを様々な高さにすることで、自分のいる層から他の層を見た時に、こちらとあちら側の違いを際立たせることで、違う世界の広がりが連続している層状空間を際立たせる。光、音など、様々な環境が変化している。層を横断しながら、様々な空間を体感する。

□全体計画の軸をズラすことで、多層の中に様々な空間をつくる

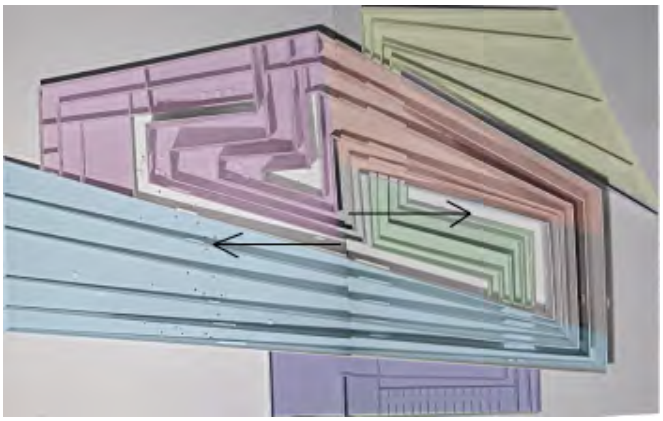


図４２　平面の軸性

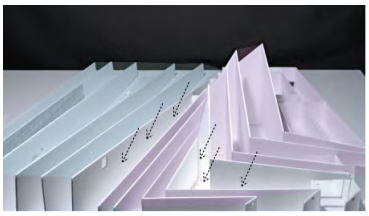


図４３　←方向鳥瞰図

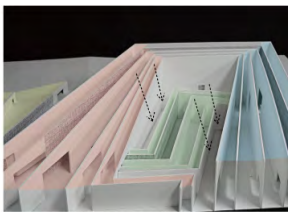


図４４　→方向鳥瞰図

様々な軸をつくることで、空間の広がり方に差違をつける。右を見れば広がり、左を見れば閉じていく。しかし壁の隣の空間に入れば、それも逆転するかもしれない。そんな様々な視界の広がりの空間をつくる。それにより、様々な可視領域の変化を起こす。

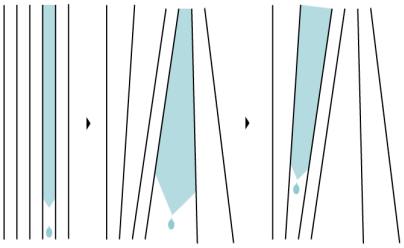


図４５　軸性ダイアグラム

□動線を通す

阿波座駅と川口・富島地区を結ぶように、南北に動線をつくる。通り抜けながら、可視領域が広がり，狭まる。その変化の中で，隣の空間に流れたり、留まったりすることで、「その先」を感じながら、空間が広がったり、縮んだりすることを体感する。

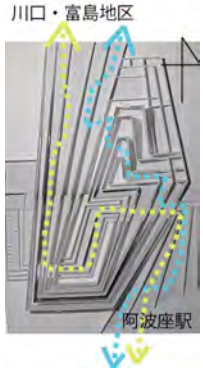


図４６　平面動線

８、プログラム

アートと図書の複合施設を提案する。

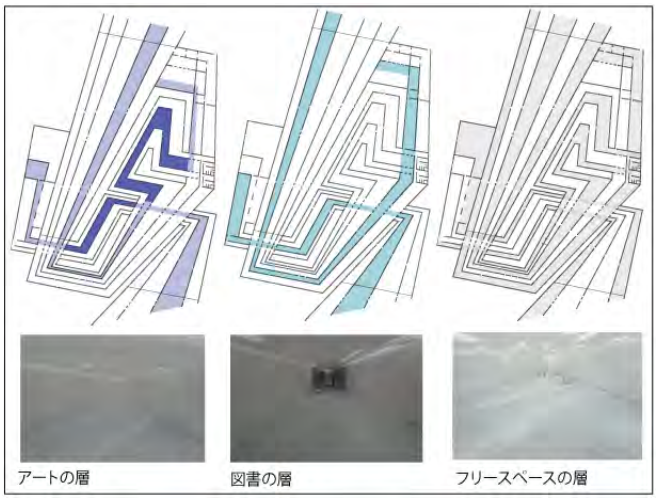


図４７　プログラムと平面関係

□アート

自由に見れる解放ゾーンと、有料ゾーンに分ける。

層と層が重なるホールから有料ゾーンとなる。

壁の高さ、広さにより、人はアートと様々な距離を持って回覧する事が出来る。

□図書

壁一面に本が積まれ、本が集まった壮大な風景ができている。一歩その層に立ち寄れば、何年もの年月を持った時間が積層された空間が待っている。

□フリースペース

図書やアートのスペースとは大局的な、光が満ちた明るい空間。壁の隣の空間との関係でイベントや特別展時、講演会等、様々なプログラムが発生する。

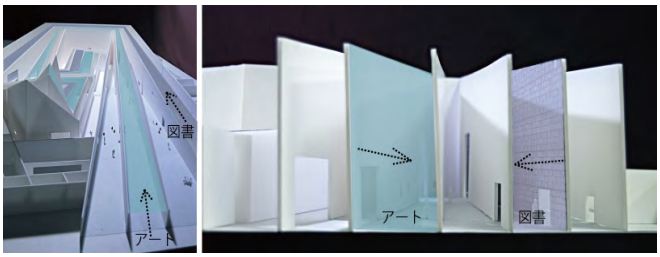


図４８　プログラム動線

それぞれの動線には、それぞれの時間が流れている。開口から気配がにじみ出る。

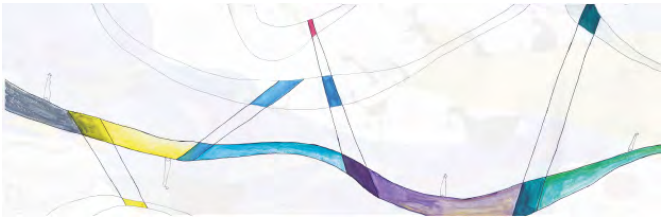


図４９　イメージパース

そして、どこかの道を歩いていると、ふと隣の空間を感じたり、隣に流れたりすることで、自分の空間と連鎖し、空間が広がっていくイメージ。

９、図面・全体イメージ

図５０　鳥瞰図　北より

面的分節の壁から始まり、可視領域の分節と連続性の関係や可視領域の変化、層と層の空間の差違性を考えながら、全体を形作った。

本を読んでいたら、隣の空間に意識がいったり、アートを見てたいら、知らないうちにホールで行われているイベントの輪の中に入ったり，知らない世界を感じながらふと歩く。アートという行為、本を読むという行為で世界を広げ、建築内を回遊することで、空間的にも広がる感覚を感じる。

図５１　鳥瞰図

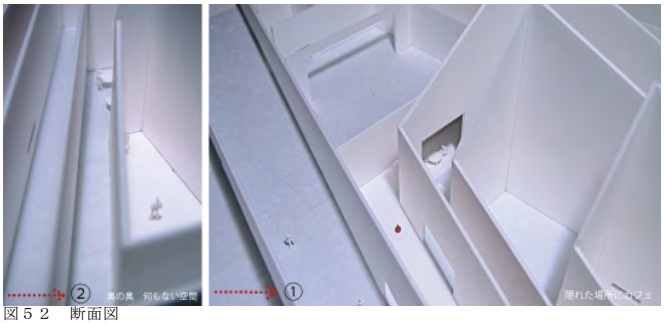
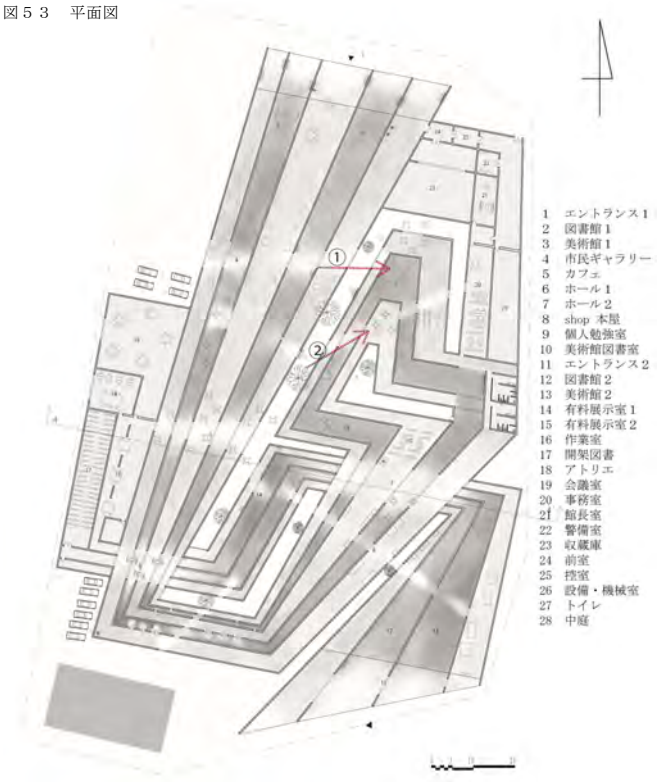


図５２　断面図

図５３　平面図



１０、結論

分析により得られた「奥」性に関する空間分節の分節と連続の関係性を応用し、壁というシンプルな形体から「奥」性を導く考え方を取り入れ、建築化した。それにより、「その先」を感じるような新しい「奥」性を生み出す空間を生み出すことが出来た。これから都市に必要とされるであろう「奥」性という空間の広がり提案の一つになったのではないかと思う。

参考文献

・槇文彦『見えがくれする都市』鹿島出版　1980
・J. J ギブソン『生態学的視覚論』サイエンス社 1985
・青木淳『原っぱと遊園地』王国社 2004
・コーリン・ロウ『マニエリスムと近代建築』彰国社　1981